

スミス研究の動向

経済資料協議会西部会では、アダム・スミス『国富論』刊行200年記念行事として、1976年5月18日、京大経済学部において、講演会を開催した。講演会には、わが国学界においてスミスに造詣の深い杉原四郎、水田洋両氏にお願いして、杉原氏には主として国内、水田氏には海外のアダム・スミス研究の歴史と現状についてお話いただいた。本稿は、その記録に若干の手を加えたものである。

日本のスミス研究

*
杉 原 四 郎

I

はじめに、おくばりした文献リストの説明をいたしておきます。

日本のスミス研究の歴史はかれこれ100年にわたっており、関係文献も相当な数にのぼっています。さいわい、すでにいろいろな文献目録が出ており、その主なものが〔I〕にあげてあるわけです。

まず最初の『本邦アダム・スミス文献』には、重要な著作に、コメントがついているのが特徴です。ただし、これは、昭和27年までの文献しか収録されておらず、戦後のスミス研究の大きな高まりが生み出した作品の多くがこれに入っていないのが残念です。スミスの会では、『国富論』200年の記念事業として、この増補新版を出版する計画です。次の天野さんのビブリオは、日本の文献だけのものではなく、外国のもふくめて、昭和30年末までが、カバーされています。水田さんの『アダム・スミス研究』の巻末の「アダム・スミス書誌」は、初版では42年まで、増訂版では47年のはじめくらいまでの内外の文献が、カバーされています。大河内一男編『国富論研究』の第3巻にある文献解題、これは私が編集したもので、水田さんのものよりはもう少し後まで、つまり昭和47年の秋頃までの文献をおさめています。大体この四つで、日本でこれまでどういう文献が出ているか、翻訳や研究、単行本や論文、それらをふくめてひろえるわけです。

*すぎはら しろう 甲南大学教授

これらの文献目録の編集方法には、それぞれ特色がありまして、最初の『アダム・スミス文献』は、全く発表年代順で、各年ごとに分類してある。天野さんのビブリオは、内容別の分類で、スミスの著作・翻訳とその研究とに二分し、研究をさらに10項目にわけてある。これらに対して水田さんの書誌では、著者名のアルファベット順にならべられています。年代順、著者名順、内容別とそれぞれにメリットがありますが、スミスの場合のような質・量ともに多様でおびただしい量に及ぶ文献をどのように総合的に編集するべきかは、今後の研究課題でしょう。

〔II〕の学界展望について。最初の私の論文は、『本邦アダム・スミス文献』が出た直後に、それをつかってわが国のスミス研究史を展望するとともに、この文献目録の問題点を指摘したものです。次の大河内、田添両氏の共同執筆の論文は、『アダム・スミスの味』というエッセイ集におさめられています。本来、英文で書かれていて、『本邦アダム・スミス文献』の英文版にのせられる予定だったが、結局、英文版がでなかったので、日本語に直して出たものです。ですから、諸段階といっても、昭和27年までで終わっている。それからは、山崎さんの「アダム・スミス——ひとつの序章」は、文部省の特定研究「日本の近代化の研究」の一環として経済学史学会関係のグループがやった研究報告の一節で、明治の初期から大正初期までのスミス研究史としては一番くわしいものです。

私の「日本におけるアダム・スミス」は、日本の研究史を戦前と戦後に二分し、各時期の主要労作に解説を加えたものです。次の論文は、『社会思想』のスミス生誕250年記念特集に寄せたもので、日本のスミスと呼ばれた田口卯吉が主宰した『東京経済雑誌』のスミス研究を紹介しました。川久保さんと大森さんのものはどちらも比較的最近の研究文献を、若い研究者らしいフレッシュな視角でとりあげています。

最後に〔III〕の座談会ですが、これはスミス研究者が、それぞれご自分の研究を回顧しながら、わりあい気楽にしゃべっている。日本のスミス研究史をみていく上に、かたくるしい学界展望よりは、ある意味で面白いものだと思います。最初の「国富論邦訳のころ」は、大内、竹内という『国富論』の代表的な邦訳を完成された元老が、高橋誠一郎という経済学史学界の最長老をまじえての鼎談です。つぎの4人の座談会では、明治から戦時中までの研究史が、田口卯吉、福田徳三、河上肇、矢内原忠雄、大河内一男の5人の業績を中心としてたどられています。『東洋経済』の『国富論』200年記念号に出ましたのは、内田、小林、水田という戦後のわが国のスミス研究を代表するトリオが座談会ではじめて顔を合わせ、各人の問題意識の重なるところや、くいちがうところをざっくばらんにしゃべっておられます。

以上のようなリストにあげましたものを読んでもらえば、何もわざわざ、私があ

らためて話すこともないのですが、わが国のスミス研究史を、以下ざっと、いくつかの時期にスポットをあてながら、ふりかえって見ることにします。

わが国のスミス研究史に関する諸文献

〔I〕 文献目録

アダム・スミスの会編『本邦アダム・スミス文献——目録および解題——』、弘文堂、昭和30年。（収録範囲、明治初年—昭和27年、以下同じ）

Bibliography of the Classical Economics, Part I. by Keitaro Amano. The Science Council of Japan. 1961. (昭和30年末まで)

水田 洋編「アダム・スミス書誌」、水田 洋『アダム・スミス研究』、未来社、1968年。（昭和42年まで、同第4刷、1972年で昭和47年初めまでを追加）

杉原四郎「アダム・スミス研究文献解題」、大河内一男編『国富論研究』III、筑摩書房、1972年。（昭和47年秋まで）

〔II〕 学界展望

杉原四郎「わが国のスミス研究史に関する覚え書——『本邦アダム・スミス文献』読後感——」、『経済論集』（関西大学）VI-4、1956年7月。

大河内一男・田添京二「日本におけるアダム・スミス研究の諸段階」、アダム・スミスの会、大河内一男編『アダム・スミスの味』、東京大学出版会、1965年。（昭和27年まで）

山崎 怜「アダム・スミス——ひとつの序章——」、杉原四郎編『近代日本の経済思想』、ミネルヴァ書房、昭和46年。（大正8年まで）

杉原四郎「日本におけるアダム・スミス」、『国富論研究』III（前掲）（昭和47年前半まで）

杉原四郎「『東京経済雑誌』のアダム・スミス」、『社会思想』（季刊）、III-1、1973年春。

川久保晃志「日本におけるアダム・スミス研究」同上。（昭和25—47年）

大森郁夫「日本におけるスミス研究の動向」、『東洋経済』近代経済学シリーズNo. 35、1976年2月13日。（昭和15—50年）

〔III〕 座談会

大内兵衛、竹内謙二、高橋誠一郎「『国富論邦訳のころ』、『アダム・スミスの味』（前掲）

大河内一男、内田義彦、杉原四郎、田添京二「アダム・スミスと日本」、『国富論研究』III（前掲）

内田義彦、小林 昇、水田 洋「私たちのスミス研究」、『東洋経済』（前掲）

II

便宜上、明治、大正・昭和、戦後と三つの時期にわけて、お話しします。

『国富論』の原本は、明治維新以前にすでにわが国に入っていました。長崎高商におられた武藤長蔵さんによりますと、シーボルトは長崎の出島に『国富論』のドイツ語訳をもってきており、この本は彼が帰国してからわが国にのこされた。また幕府の開成所には1863年にエディンバラで出た『国富論』の版本が入っており、これは今も静岡の図書館にあります。ドイツ語訳の方はともかく、英語の原本は幕末にすでに誰かによって読まれていたかもしれません。神田孝平の訳したエリスの『経済小学』がすでに慶応3年に刊行されていますし、経済学の基礎知識は、維新以後急速に普及してゆきます。そして明治15年からわが国で最初の『国富論』の翻訳が分冊で出版されはじめます。それが21年にやっと完成した。訳者は石川暎作と嵯峨正作の2人で、田口卯吉の経済雑誌社から出ました。維新後わずか20年にして、この大著の翻訳、アジアではもとより最初の翻訳が完成したということ、しかもそれが民間の出版社から出され、訳者も国立大学の教授などではなく、在野の青年たちだったということは、十分注目に値することだと思われます。

京都大学で日本経済史と日本経済思想史を講義されていた本庄栄治郎先生は、明治初年を官著時代となづけておられますが、たしかにその頃には元老院や大蔵省や文部省からさかんに外国の経済書の邦訳が刊行されました。ですから『国富論』の邦訳も政府刊行物として出されたのならともかく、経営の基礎もそれほど強固でない民間の出版社があえてこの事業にいどみ、それを完成させた原動力として、田口を中心とする経済雑誌社の、自由主義経済体制をこの国に確立させるべきだという強い信念というか執念というか、そういうものがあったと思われます。石川暎作が福沢諭吉の門下であったことも、さこそと思ひ合わされますね。

その慶応義塾では、明治20年頃から東大あたりではそれまでの英・米・仏系の自由主義的経済学にかわってドイツ国家学の一環としての経済学が講義の中心となつてゆくのに、ずっと自由主義的な学風がつづくのですが、明治44年に、『三田学会雑誌』がアダム・スミス記念号を出したのも、そうした学風のあらわれといえましょう。スミス記念というのは、慶応に『国富論』の初版本が所蔵されることになったのと、それが出版されて「大約百五十年」になるというので、慶応のスタッフがそれぞれの専門の立場でスミスを論じているわけです。小泉信三が「スミス略伝及国富論諸版本について」、気賀勘重が「スミスの価値学説」、田中萃一郎が「スミスの政治学説」、川合貞一が「倫理学者としてのアダム・スミス」を書いているという風に、スミスは単なる経済学者としてではなく、いわんやただ自由貿易論の創設

者としてだけではなく、スミスの思想を全体として、総合的に見ようとする、また資料的にもオリジナルにもとづいて論じようとする基本姿勢^{追註}がうかがわれます。

追註 石川・嵯峨共訳『富国論』については、つぎの文献を参照されたい。杉原四郎「近代日本黎明期のスミス——『国富論』の本邦初訳を中心として——」、『経済学史学会編『国富論の成立』（岩波書店、1976年）所収、大河内暁男「石川・嵯峨訳『富国論』の形成」、『経済学論集』42—4、1976年。

明治も末のこの頃になると、慶応だけではなく、わが国の経済学界が全体としてアカデミックな体制をとのえてきます。その指標をいくつかあげますと、明治29年に発足した社会政策学会は、経済学についての全国的・総合的な最初の学会ですが、それが明治40年から毎年大会をひらくようになる、つまりこの頃から本格的な活動期に入ったわけです。また経済学の総合的な学術雑誌も出はじめました。明治39年に創刊された『国民経済雑誌』がそれで、東京と神戸の二つの高商の教授が編集にあたっていますが、帝大系の学者も執筆している全国的な雑誌です。この他に各大学の機関誌も、明治20年以来出されていた『国家学会雑誌』——これは東大の、法学をのぞく社会科学の専門誌で、経済学もふくまれています——の他に、明治35年には京大から法律・政治・経済の研究雑誌『内外論叢』が出、それが明治39年には『京都法学会雑誌』となりますし、さきにあげた慶応の『三田学会雑誌』も明治42年に創刊される。そしてこれらの学会や学術雑誌を通じて学者の研究の交流がすすみ、わが国で経済学についてもアカデミズムが徐々に形成されてゆくわけです。

つぎの時代のアカデミズムを代表する2人の経済学者、福田徳三と河上肇も、明治末期にこうした雑誌に論文を書きはじめています。たとえば福田は、明治42年6月の『国民経済雑誌』に「マルクスの不変・可変資本とスミスの固定・流動資本との関係に就ての研究」を書いています。これはわが国でマルクスの『資本論』と『国富論』とを経済理論的に比較して論じた最初のものではないかと思われます。この頃の河上にはこのようなスミスに関する理論的なモノグラフィーはまだありませんが、彼が明治44年に出した評論集『時勢之変』には、『国富論』の中の分業論や動物増殖論が引用・紹介されていて、彼が早くからスミスに関心をもっていたことがわかります。

最後にこの頃『国富論』の新訳があらわれたことを指摘しておきましょう。三上正毅訳述『富国論』がそれで、明治43年には日進堂から出ました。底本はアシュリーによる縮約版です。この訳本は版を重ね、『国富論』の普及に貢献したのですが、それに大隈重信が序文をよせているのが注目されます。御承知のように、大隈は明治14年の政変で下野し、官学がドイツ的・国家主義的な社会科学に傾いてゆくのに対抗して、早稲田に東京専門学校をつくる、こうして三田の慶応とある意味では共

通の性格をもった早稲田の在野的な学風が形成されてゆくのですが、その大隈が『国富論』の新訳に序文をよせ、その中で、彼はこういっています。たしかにドイツでスミスの学風に反対する国民的歴史的経済思想がおこってきた、だがよく見ると、ドイツの経済学もその淵源はスミスに負うところが多いことがわかる。わが国でも維新以来スミスの思想は大いにむかえられてきた、もとよりスミスの時代と現在とは時代がちがうから、自由放任主義を絶対視はできないが、『国富論』が今も「光輝ある古典」として尊重さるべきものであることは「疑を容れざるなり」。

III

つぎは大正から昭和の20年にいたる時期に入ります。

この時代の最初のハイライトは、何といてもスミスの生誕200年にあたる1923年、つまり大正12年ですが、この年に日本で講演会や雑誌の特輯など多くの記念の行事が行われました。たとえば本学（京大）でも、スミスの誕生日である6月5日に、講演会と関係資料の展覧会があり、4枚1組の記念絵葉書が参加者にくばられました。さらに京大経済学会の機関誌の『経済論叢』は、その翌年の1月号をスミス生誕記念号にあて、全巻をスミス関係の論文と記事でうずめています。この種の催しは京大だけでなく、東京でも種々のかたちで行われ、東大の『経済学論集』、慶応の『三田学会雑誌』、東京商大の『商学研究』、それに『大原社会問題研究所雑誌』や『東京経済雑誌』なども、それぞれスミスの特輯号を出しました。

大正12年という時期に、日本でこんなに盛大なスミスの記念行事が行われたのは、いろいろな理由があったと思われます。一つは当時はいわゆる大正デモクラシーの時代であり、わが国の社会がまがりなりにも市民社会の雰囲気をもつことができるようになった、その時期にちょうどイギリス市民社会の代表的な思想家スミスの生誕200年がめぐってきたわけですね。第2に大正8年には東大と京大とで経済学部が法学部から独立し、つづいて東京と神戸の両高商も商大に昇格するという風に、経済学の研究と教育とが大いに重視されるようになってきた。そこに経済学の創始者であるスミスの生誕200年をむかえたので、これらの記念行事は、スミスを通じて経済学という学問の意義を世間に訴えるという意味があったのです。第3に、大正も後期になると、こういう行事を学問的に行うほどの力を、わが国のアカデミズムはそなえるにいたった。この点はさきにあげました各大学の特輯号を、前に紹介した明治44年の『三田学会雑誌』の記念号とくらべてみるとわかります。

こうした大正末期におけるスミス研究の水準と特色をしめす業績として、三つのことをあげておきたいと思います。一つはキャンナン版をテキストとする『国富論』の新しい全訳が竹内謙二によって、大正10年から12年にかけて刊行されたこと、第

二は河上肇のスミス乃至は古典学派の研究のまとめであるユニークな経済学史の著作、『資本主義経済学』の史的発展』が大正12年に出了こと、そして第3には、東大の矢内原忠雄が大正14年に発表した「アダム・スミスの植民地論」という論文をめぐって論争がおきたことです。論争の内容にはここでは立ち入りませんが、矢内原がスミスの植民地論をとりあげたのには、わが国の植民政策に対する彼の批判的な問題意識があり、スミスの植民地論を通じて自由主義的な植民政策の重要性が主張されている点が大切です。

ところで大正中頃以降、マルクス主義がわが国に本格的に入って参りまして、社会運動の面だけでなく、学界や思想界にも大きな影響をあたえるようになります。それとともに社会政策学会の中にも左右の思想的対立が目立って参りまして、結局学会は自然消失のようなかたちになり、高野岩三郎ら左派の人々によって大原社会問題研究所がつくられます。河上肇も個人雑誌の『社会問題研究』を大正8年に創刊して以来、マルクス研究に力を入れ、福田徳三とマルクスの資本蓄積論をめぐって論争したりいたします。とりわけ彼はさきにふれた『資本主義経済学』の史的発展』のもっている人道主義的色彩を櫛田民蔵に批判されてから、一層マルクスの研究にうちこみます。大正12年に出了『大原社会問題研究所雑誌』の創刊号には、ローザ・ルクセンブルグの「古典派、俗流歴史学派及びマルクス派経済学」という論文が久留間鮎造によって訳されてのっています、スミスや古典学派の研究も、唯物史観にもとづいて、マルクスの価値論や剰余価値論との関連においてなされる、そういった研究が多くなってゆきます。マルクスの『経済学批判』や『資本論』や『剰余価値学説』が大正の末から昭和のはじめにかけて相ついで翻訳されること、この傾向に拍車をかけるわけです。大正15年に出了住谷悦治の『唯物史観よりみたる経済学史』や久留間鮎造の「経済学史」——これは新潮社の『社会問題講座』に連載されたものです——、それから昭和3年に出了波多野鼎の『正統学派の価値学説』などは、こうした立場からのスミス研究をふくんでおります。

だがこのようなマルクス主義的な学史研究は、マルクス主義そのものが弾圧され、学問研究の自由が制約されるにつれて姿を消してゆきます。戦時体制下のわが国では、マルクス経済学にかかわって国家主義的な経済思想がさかんになり、イギリスやフランスやアメリカの経済学よりもドイツの経済思想が重視されるようになります。そしてスミスもマルクスとの対比で論じられるのにかかわって、ドイツ歴史学派の先駆者であったリストとの対比でとりあげられることが多くなりました。戦時中のわが国が生んだ二つの重要なスミス研究も、ともに「スミスとリスト」という視角でスミスをとりあげておりました。昭和16年に出了高島善哉の『経済社会学の根本問題——経済社会学者としてのスミスとリスト——』と、昭和18年に出了大河内一男

『スミスとリスト——経済倫理と経済理論——』との二つがそれです。

この二つの著作は、リストのスミス批判の尻馬にのってスミスの個人主義や自由主義をたたくというような時局便乗型の研究では決してありません。2人の間に問題意識のちがいはあっても、スミスの経済学の積極的な面をひき出してきて、しかもこれまでのマルクス経済学的なスミス研究が主力をそそいできた価値論や剰余価値論ではなく、もっと広い視野からスミスの理論体系をとらえ直すことによって、経済学のあるべき姿を見きわめたいというねらいでは共通しております。

このような新しいスミス研究をささえる問題意識は、当時の社会科学の領域にみられる他の新傾向、つまり大塚久雄のイギリス経済史の研究や、川島武宜の法社会学的な研究などとも共通のものでありまして、近代的な生産力の根元は一体何であるか、生産力をすすくとおぼすような社会関係や人間のモラルはどのようなものかを種々の角度から追求して、明治以降のわが国の近代化が生み出したゆがみを明確にしようとするものでした。こうした研究の成果は、戦後わが国の社会構造の変革が現実の問題となったとき、戦時中の貴重な学問的成果として高く評価され、大きな影響を及ぼすことになります。

昭和15年から19年にかけて大内兵衛によって『国富論』の新訳が刊行されたことも、戦時中の成果でした。思想問題で東大を休職になっていた大内が、ベティやスミスなど、マルクスが重んじたイギリスの社会科学の古典の研究に沈潜したことは、時局に対する抵抗の一つの姿勢をしめしています。昭和15年、1940年はスミス死後150年にあたりました。生誕200年のときのような華々しい行事はみられませんでした。が、わが国のスミス研究の新しい方向が、実はその頃いろいろなかたちで力づくすすめられていたわけで、昭和15年に出た大道安次郎『スミス経済学の生成と発展』もその一つです。

IV

最後に戦後のスミス研究についてのべることにします。

戦後のわが国でスミス研究は大きく発展しましたが、それにはつぎのような背景があったと思われます。一つはさきにみたような戦時中の遺産があったということ、二つには戦後の民主的諸政策によって、われわれもスミスの社会的諸相を生活の実感で理解しうようになったということ、そして第三に、スミスとの対比で問題とされるマルクスの研究が再開され、マルクス研究が幅と厚味を加えるに応じてスミス研究もまた戦前の水準をこえるようになったこと。このような事情が相俟ってスミスの研究を活発にすすめてきました。戦後発足したアダム・スミスの会や経済学史学会が研究者の交流の場所を提供しました。そして昭和27・8年ごろには、戦後

段階の水準をしめす力作がつつぎつつぎに発表されることになります。

その一つである内田義彦の『経済学の生誕』（昭和28年）は、その基本視角をつぎのようにのべています。スミスの『国富論』は経済学の古典であるだけではなく、社会体制を認識するための学問にとっての古典であり、またそういうものとして読まれなければならない、そしてその場合歴史認識の基礎理論としてのマルクス経済学がつねにそれに対決するものとして考えられていなければならない、と。内田氏のこうした視角は、同時に、戦前のスミス研究の二つの流れを統一的に継承しようとする意図があります。すなわち価値論や剰余価値論を中心にスミスの経済理論を、『国富論』でいえば第1編と第2編に展開されている経済理論を分析してきた流れと、イギリス市民社会形成史論の一環としてスミスをとらえる、そしてこの場合は当然に『国富論』の第3・4・5編の歴史や政策をとりあつかう部分や、『国富論』のみならず『道徳感情論』や『グラスゴー大学講義』なども視野に入れて考察しようとする流れとを統一しようとする意図があるわけです。『生誕』の前編で氏は、旧帝国主義批判という時論的な課題をスミスがどのような理論でこたえようとしたかをのべていますが、ここには大塚史学の比較経済史的な研究の成果も生かされています。また『生誕』の後編の『国富論』分析は、従来の価値・剰余価値論的視角を蓄積論にまで拡大し、ケネーとの対比でスミスの再生産論のもつ特色を浮き彫りにしようとしています。

内田氏のこうしたスミス研究は、戦前の遺産を継承しつつさらにそれを発展させたものとして大きな反響をよびましたが、小林昇氏は『生誕』の貢献を高く評価しながら、スミスの経済学の特色を解明するためには、ケネーだけではなくイギリス重商主義との関連をもっとくわしく検討する必要があるはしないかとして、氏みずからこの課題にとりくみました。『重商主義の経済理論』（昭和27年）にはじまる小林氏のジェームズ・ステュアートを中心としたイギリス重商主義者たちの著作の綿密な検討は、スミスの経済理論の内在的な理解を深めるうえに大きく貢献しています。とくにスミスの経済学が貨幣的分析に弱く、重商主義との抽象的対立におちいつているというマルクスの指摘を原資料に即して説得的に解明した点は重要です。また小林氏はリストの研究でも戦前的大河内・高島の研究を一層発展させ、後進資本主義の立場からのリストのスミス批判のもつ意義を説くことによって、スミス理論のもっているもう一つの限界をあきらかにしました。小林氏のこうしたスミス研究は、昭和36年に出た『経済学の形成時代』や昭和48年の『国富論体系の成立』にまとめられております。

内田・小林の両氏とならんで、戦後のスミス研究の一翼をになう人に水田洋氏がいます。氏の業績は、スミスのかずかずの著作の翻訳、すなわち『グラスゴー大学

講義——これは高島善哉氏との共訳です——、『国富論草稿』、『国富論』初版、『道徳感情論』などの翻訳や、スミスの蔵書目録の検討といった地味なものとともに、氏の処女作『近代人の形成』におけるホッブズ研究を出発点とするところの、近代社会思想史的なアプローチでスミスの思想の全体像にせまろうとする雄大なパースペクティブをもった研究があります。アダム・スミスの会から第1回のアダム・スミス賞を授けられた『アダム・スミス研究』（昭和43年）はその成果です。氏の活動は国際的で、しばしば外国に赴き、史料探訪や各国の研究者と接触しています。経済学にかぎらず戦後のわが国の学問の特色の一つは、外国との研究交流が非常に活発になったことですが、社会経済思想史、とりわけ近代イギリスの思想史の分野でのこうした交流の上で水田氏は大きな役割をはたしました。『国富論』200年記念論文集がさきごろオックスフォード大学出版部から出されましたが、それに寄稿している世界の学者30人の中の1人として、水田氏が *Moral philosophy and civil society* という論文を書いているのも、いま紹介したような氏のこれまでの多面的な活動から見て、当然のことといえましょう。

以上3人の業績を中心に戦後のスミス研究を概観しましたが、戦後も30年をすぎ、今やわが国の学界は、こうした「戦中派」の人々の業績をうけついで、さらにスミス研究を深めてゆこうとする新しい世代による研究が、ぼつぼつみのりはじめようとしています。『国富論』200年というこの記念すべき年が、その傾向を促進することに役立つことが切に期待されるわけです。